

内容梗概

プログラミングが重要視されている昨今では、プログラミングの授業が小学校に導入されるなど、プログラミングの一般教養化が推し進められている。しかしプログラミングを楽しむためにはある程度の習熟を必要とする。プログラミング初学者でもプログラミングの楽しさを感じられるように学習コンテンツをデザインできれば、初学者の学習モチベーションを損ねることなく、プログラミングをさせることができると考えられる。

そこで本研究では初学者の継続的なプログラミング学習を促すため、2つのアプリケーションを開発した。1つ目はエンタテインメントによりコードリーディングを促進するシステムである。このシステムではクイズ、占いといったエンタテインメントを交えてGitHubにあるソースコードを表示し、ユーザに読解させることにより、楽しみながらコードリーディングを促進することを目指した。実装したアプリケーションを使用し、筆者の所属する研究室のメンバーを対象に運用を行い、その後アンケート調査を行った結果、クイズに関しては楽しかったという回答が得られたが、ややプログラミング初学者にとっては難解であるという意見が得られた。また日常的な使用を促すために更なる工夫が必要であり、これらの問題点を今後改善していく予定である。2つ目はライブコーディングの要素を取り入れた対人形式のプログラミングゲームである。このシステムでは習熟度の高いプログラマがそのプログラミングスキルによって力量を競うことができ、プログラミング初学者でも観戦して楽しむことができるゲームの作成を通して、初学者のプログラミングに対する興味関心を高めることを目指した。評価実験では実際に2人のプログラマの対戦を初学者に観戦させ、プレイヤであるプログラマと観戦した初学者の双方にアンケート調査を行った。実験結果としてシステムのプレイ・観戦は楽しく、プログラミングに対する興味が高まったなどシステムに対する肯定的な意見が多く得られたが、ゲームシステム・デザインの改善点に関するコメントも多く得られた。この結果を受け、今後は提案システムを改善すると共に、より多くのプログラミング初学者を含むプログラマにシステムを使用させ、より良いシステムの構築を目指す。

目次

1	はじめに	1
2	コードリーディング支援システムに関する研究	2
2.1	関連研究	2
2.2	設計指針	2
2.3	提案システム	3
2.3.1	実装機能	3
2.4	プロトタイプシステム	4
2.4.1	ケーススタディ	4
2.5	Web アプリケーション	7
2.6	課題と考察	7
3	競技性・観戦性を拡張したプログラミングゲームの開発	9
3.1	関連研究・関連システム	9
3.1.1	プログラミングを用いたエンタテインメントシステム	9
3.1.2	初学者向けプログラミング学習支援システム	9
3.1.3	エンタテインメントを活用したプログラミング学習支援システム	9
3.2	設計指針	10
3.3	提案システム	10
3.3.1	自機プログラミングフェイズ	11
3.3.2	行動プログラミングフェイズ	11
3.3.3	ゲームフェイズ	12
3.4	評価実験	12
3.4.1	実験参加者	14
3.4.2	実験内容	14
3.4.3	実験結果	15
3.4.4	考察	19
3.5	課題	21
4	まとめ	22

謝辭	23
----	----

参考文献	24
------	----

1 はじめに

昨今、自然言語での読み書きや健康のために行う運動のようにプログラミングを一般教養にしようとする動きがある。小学校におけるプログラミング教育の必修化がその最たる例で、将来プログラミングに関わる職業につかない人でもプログラミングに関する知識やその考え方をある程度身につける方が望ましいと考えられている。

しかし最初から理解が容易で楽しさを感じやすい読み書きや運動とは異なり、プログラミングは楽しさを感じるまでにある程度の習熟を要する。よく書かれた小説などの文章やプロスポーツでのファインプレーには初心者でも心動かされるもので、そうした小説家やスポーツ選手への憧れが自ら書くことや体を動かすへの感心を高めるが、プログラミングの場合にはそのような憧れを持つ機会に乏しいのが現状である。プログラミング初学者にプログラミングの楽しさを実感させるために設計された学習コンテンツは多数存在するが、その多くは小・中学生など若い年代をターゲットに設計されているため、高校生や大学生などには向かない。

本研究ではプログラミング初学者のプログラミングに対する興味関心を高めるため、ゲーミフィケーションやゲームといったエンタテインメントの要素を組み込んだコンテンツを開発し、初学者を対象に運用を行うことでその効果を検証した。

本論文では以降、2章でゲーミフィケーションを用いたコードリーディング支援システムについて述べ、3章でプログラミング初学者の興味喚起を目的としたプログラミングゲームについて述べる。4章で本論文をまとめる。

2 コードリーディング支援システムに関する研究

本項では、プログラミング初学者向けに作成したエンタテインメントの要素を用いたコードリーディングシステムについて紹介し、その運用結果と課題について議論する。

2.1 関連研究

GitHub を活用した研究はいくつかある。永野らの研究 [1] では GitHub と StackOverflow のデータを用いて双方を利用するユーザについて調査している。この研究ではユーザが GitHub で作成したリポジトリと StackOverflow への投稿のコンテンツの関連性について調べたもので、双方への投稿コンテンツに一定の相関があることを示している。また柴藤らは GitHub 上の断片データに関する情報を取得できるシステムを開発している [2]。このシステムではユーザが指定したソースコード中の一部の連続したコードに関するプルリクエストを取得できるというものであり、ソースコードを閲覧する際の利便性を高めている。

またエンタテインメントの要素、特にゲーミフィケーションを活用した研究も盛んである。一ノ瀬らの研究 [3] ではソースコード上の技術的負債を可視化し、さらにゲーミフィケーションの要素を加えることで技術的負債の除去を促している。この研究ではソースコードのファイル構造を街のように可視化し、技術的負債が存在するファイルを目立たせ、さらに技術的負債を取り除いたユーザをランキング形式で表示することによって、ゲーミフィケーションの要素を元に生産的な行動を促している。

なおコードリーディング支援に関してもいくつか研究がなされており、大村らや石尾らはソースコードを読解する際のコードリーディング支援を行うツールを開発している [5][6]。しかし、これらの研究ではある程度プログラミングに習熟したプログラマがソースコードを読むという状況を想定しているため、コードに触れる機会を増やすための本研究とは目的が異なる。

2.2 設計指針

システムを実装するにあたり以下の設計指針を設けた。

1. 遊び(エンタテインメント)の要素を取り入れる

コードリーディングはプログラミングにおいて重要なスキルの1つであるが、プログラムを読解する経験の少ないプログラミング初学者にとって、淡白なプログラムをただ読み込むことは難しい。よってエンタテインメントの要素を付与して

プログラムを読ませることで、コードリーディングの心理的障壁を下げることを目指した。

2. 日常的に使用するツールに組み込む

アスリートが継続的なトレーニングを怠らないように、ある技能を高めるには日常的な鍛錬を要する。プログラミングにおけるコードリーディングでも同様であると考え、極力システム利用のハードルを下げるためにシステムを日常的に使用するデバイス・アプリケーションから使用できるように設計した。

3. プログラムを読むことに専念させる

プログラムの記述を促進するならば対象のソースコードを1つの言語に絞るべきという考え方もある。コードを書くことが目的であれば、複数の言語を同時進行させることは混乱を招き、デメリットが大きい。しかし、コードを読むことが目的であれば、上級者との会話のきっかけができる、将来的に適材適所で言語を使い分けることにつながる、飽きずにシステムを使用させ、コードの読解に興味を持たせることにつながるなどメリットが大きい、従って本システムでは、多様な言語に触れられる機能と1つの言語に読解を絞った機能を実装した。

2.3 提案システム

2.3.1 実装機能

システムで利用できる2つの機能について説明する。

1. クイズ機能

この機能はユーザが使用した際に GitHub から取得したランダムなプログラムを表示する。ユーザは表示されたプログラムを読み、どのプログラミング言語で記述されたプログラムかを回答する。正解した場合は得点が得られ、取得した累計得点の多さによるランキングが表示される。

2. 占い機能

この機能をユーザが使用すると GitHub からランダムに得られたプログラムが表示され、ユーザはそれを読解し自分なりの解釈をすることで、その日の運勢を占う。表示されたソースコードの意味を解釈することが必要であるため、必然的にコードの読解が必要となる。この機能においては表示されるプログラムを JavaScript で記述されたもののみにした。

2.4 プロトタイプシステム

初めに、提案システムをチームコミュニケーションツールである Slack の bot として実装した。システムを利用する際は、この bot を導入しているチャンネルでコマンドを入力することで各機能を使用できる。利用可能なコマンドを表 1 に示す。またクイズ機能の様子を図 1 に、占い機能の様子を図 2 に示す。



図 1: クイズ機能の様子



図 2: 占い機能の様子

2.4.1 ケーススタディ

このシステムを筆者が所属する研究室の Slack に導入し、研究室のメンバーを対象としたケーススタディを行った.. 研究室のメンバーは 3 名のプログラミング初学者で

表 1: コマンド一覧

コマンド	説明
fortune	1日の運勢を占うソースコードを表示
quiz	記述言語を問うクイズを出題
hint	クイズに関するヒントを表示
answer	クイズの回答を表示
score	各ユーザの累計得点を表示

あり、1週間自由に機能を使用してもらい、各コマンドの使用回数を調べた。またアンケートによって所感を調査した。アンケートの内容を以下に示す。

- どのような状況で機能を使用したか
- 占い機能について、楽しかったか (5段階評価, 1: 楽しくなかった, 5: 楽しかった)
- 占い機能について、どのような点が楽しかった (楽しくなかった) か
- クイズ機能について、楽しかったか (5段階評価, 1: 楽しくなかった, 5: 楽しかった)
- クイズ機能について、どのような点が楽しかった (楽しくなかった) か
- 機能を使用したことによって学びがあったか
- どのような学びがあったか
- コードを読むことへの抵抗は減ったと感じるか (5段階評価, 1: 減らなかった, 5: 減った)
- 今後も機能を使いたいのか
- 感想, 意見, 改善点など

各コマンドの使用回数を表2に示す。

コマンドの使用回数に関しては、クイズ機能に関連した機能が多い結果となり、占い機能に関しては使用回数が少なかった。また期間中の最初の3日間ほどは頻繁にシステムが使用されていたが、期間の後半においてはあまり活発に使用されていなかった。またどの機能も個別に使用するより、ユーザが実際に会って集まっている際にコミュニケーションを交えて使用されることが多かった。

次にアンケート結果を表3に示す。

表 2: 各コマンドの使用回数

コマンド	使用回数
fortune	9
quiz	43
hint	27
answer	3
score	33

表 3: アンケート結果

インタビュー内容	被験者 A	被験者 B	被験者 C
占い機能は楽しかったか	1	2	3
クイズ機能は楽しかったか	4	4	5
コードへの抵抗感は減ったか	3	5	5

まず占い機能に関してだが、使用する楽しさの評価は低い結果となった。ユーザの意見には「提示されたプログラムをどう解釈すればいいのか分からなかった」「占いという感触があまりなかった」などがあり、プログラミング初学者にとってプログラムを読解して独自の解釈を持たせることは難しく、面白みに欠けているようだった。またクイズ機能に関しては楽しさに関して高い評価が得られた。その理由として「スコアがあると、競争している感が出るのが楽しく感じた」「みんなで一緒にやっていて競争っぽくなる時楽しかった」などの意見があり、スコアを用いたゲーミフィケーション、競争の要素がシステム使用のモチベーションを高めていた。また「以前に出た言語の特徴に似ていると感じ、調べずに答えて正解したとき楽しかった」という意見が得られ、クイズを通したコードリーディングによってプログラミング言語の特徴を捉え、それに楽しみを感じていることが分かった。なお「機能を使用したことによって学びがあったか」という質問には全員が「あった」と回答し、「どのような学びがあったか」という質問には「言語ごとの文法の特徴が何となく分かってきた」「いろんな言語の存在を知ることができました」「今まで聞いたこともなかったプログラミング言語の名前を知り、親近感をもった」という回答があり、各プログラミング言語の特徴について理解するとともにプログラミングに対する親近感を抱かせることができていた。またコードへの抵抗感に関する質問でも肯定的な評価が得られ、「今後も機能を使いたい」という質問に対して全員が「使いたい」と回答した。なおシステムの改善点に関して「プログラムのある GitHub のページへのリンクを表示して欲しい」「占いの際にラッキーアイテムなどを表示して欲しい」等の意見が得られたため、アンケート結果を元にプロトタイプを改善したシステムを開発した。

2.5 Web アプリケーション

プロトタイプシステムを用いたケーススタディで得られた結果を元に、プロトタイプシステムを改善し、Web アプリケーションとして再実装した。Web アプリケーションとして実装したのは Slack bot よりも開けたコミュニティでより多くのユーザの意見を取り入れるためである。このアプリケーションでは指定の URL にアクセスすることでクイズ・占いの機能を使用でき、ユーザ登録をしログインすることでクイズ正解時に得た得点の累計によるユーザのランキングを閲覧することができる。またクイズ機能においてはそのクイズに対するユーザの正答率、占い機能においては選ばれたプログラムに含まれているコメントの量、宣言された関数の数などから独自に算出した対人運、仕事運、コメントなどを表示するようにした。クイズ機能の様子を 3 に、占い機能の様子を 4 に示す。また実装したアプリケーションを Ubiquitous Wearable Workshop2019 にて参加者に使用させた。占い・クイズ機能ともに使用され、表示されたプログラムを見せ合うなどシステムを介したコミュニケーションが見られたが、「クイズが難しすぎて逆にプログラムに対する抵抗感が生まれた」というコメントもあった。

クイズ

このコードは何の言語で書かれているでしょうか?

正答率0%

```

    itemView.tvTitle.text = "set text by itemView"
    containerView?.tvTitle?.text = "set text by containerView"

    View var10000 = this.itemView;
    TextView var7 = (TextView)var10000.findViewById(id.tvTitle);
    var7.setText((CharSequence)"set text by itemView");
    var10000 = this.getContainerView();
    if (var10000 != null) {
        var7 = (TextView)var10000.findViewById(id.tvTitle);
        if (var7 != null) {
            var7.setText((CharSequence)"set text by containerView");
        }
    }
}

```

回答

図 3: クイズ機能の様子

2.6 課題と考察

提案システムの実装と運用を通して、エンタテインメントの要素、特にクイズの要素を交えてプログラミング初学者のコードリーディングを促進することは、有効な方



図 4: 占い機能の様子

策であると考えられる。またその中で他者と競争するゲーミフィケーションはシステム使用のモチベーションとなり、これをプログラミング学習に取り込むことで有益な学習コンテンツを作成できると感じた。しかし、現状実装したアプリケーションには不十分な箇所が多く、より適切なゲームデザイン、ユーザがシステムを使い続けるための工夫、どのようなアルゴリズムでプログラムを選び、初学者に提示するかなど課題は多い。今後はこのシステムを通して得られた課題・観点を元に、より良いプログラミング学習コンテンツを作成していく。

3 競技性・観戦性を拡張したプログラミングゲームの開発

本項では、プログラミング初学者の興味喚起を目的としたプログラミングゲームのプロトタイプについて紹介し、設計指針に基づくデザインの詳細や行った評価実験と見つかった課題、実験に関する考察について議論する。

3.1 関連研究・関連システム

3.1.1 プログラミングを用いたエンタテインメントシステム

プログラミングとエンタテインメントを掛け合わせたコンテンツはいくつか存在する。TopCoder[7]などの競技プログラミングやコードゴルフ[8]、SECCON[9]などのハッキングコンテストが有名であり、プログラマの間でも根強い人気がある。またプログラミングゲームとしてはRobocode[10]が有名である。しかしこれらはある程度プログラミングに習熟したプログラマ向けのコンテンツであるため、数学やセキュリティ、コンピュータサイエンス等の知識を要するためプログラミング初学者が参加するにはハードルが高い。

3.1.2 初学者向けプログラミング学習支援システム

初学者向けプログラミング学習支援システムは数多く存在する。Scratch[11]、Viscuit[12]などはその代表的な例であり、低年齢層をターゲットにした設計でブロックや絵を並べることでプログラミングでき、初学者にプログラミングの楽しさを伝えるためにデザインされている。またドリトル[13]は中学校・高等学校での教育目的に使える環境を目指し、テキストベースでプログラミングさせつつも柔軟かつ小さい言語仕様により、初学者にプログラミングの楽しさを伝えることを目指している。しかしプログラマに対する憧れを創出し、プログラミングへのモチベーションを高めるという本研究のアプローチとは異なる。

3.1.3 エンタテインメントを活用したプログラミング学習支援システム

エンタテインメントの要素を盛り込むことでプログラミング学習を促進しようとした研究は多くある。Joshuaらはプログラミングゲームを用いてプログラミング初学者の問題解決能力を向上させるためのシステムを作成している[14]。また水口の研究ではプログラミングの講義における成績評価にロボットバトルシミュレーション型のプログラミングゲームを活用している[15]。三谷らの研究ではキャラクタをプログラムで制御するプログラミングゲームでプログラミングスキルの向上を図っている[16]。なお増谷

らの開発した VLogic[17] では VR 空間上にブロックベースのプログラミングゲームを実装することで手足を使ってプログラミングを体験することができ、プログラミングに対する興味喚起を行っている。これらはプログラミングの習熟度が高くななくても使用できるが、従来のプログラミングゲーム同様静的なゲーム展開であり、プログラマ同士のリアルタイムな駆け引きやアドリブといった観戦を楽しむ設計は成されていない。

3.2 設計指針

提案システムの実装にあたり、初学者の興味関心を高めるために3つの設計指針を設けた。

1. 観戦するにあたり、高度な専門知識を必要としない

初学者が提案システムでの対戦を観戦するにあたり高度な専門知識を必要としてしまつては、利用の心理的ハードルを上げかねない。極力前提知識なしに理解し、楽しめるようにデザインする必要がある。

2. 手間がかからない

初学者にとってプログラミング学習をする際に環境構築や普段使用しない独自ソフトウェアのインストールはモチベーションを下げかねない。今回は提案システムを JavaScript によって制御可能な Web アプリケーションとして実装し、初学者が実際にプログラミングを行わずとも見るだけで利用できるようにした。

3. リアルタイムな駆け引き・アドリブを取り入れる

従来のプログラミング教育コンテンツとは異なり、スポーツなどの観戦する競技で見られるようなリアルタイムな駆け引き・アドリブの要素を提案システムに組み込むことで観戦して楽しめるようなデザインをする。

3.3 提案システム

本研究で提案するシステムでは、プログラミング初学者の興味喚起をするためにいくつかの工夫を施した。今回実装したシステムは、プログラマ同士がリアルタイムにプログラミングを行うことでキャラクタを制御し、対戦するという対人形式のプログラミングゲームである。この対戦の様子を初学者に観戦させることで、初学者のプログラミングに対する興味を高める。プログラミングゲームとして実装した理由としては、キャラクタがプログラムによって動作するというゲームの視覚的な出力が、初学者にとってプログラムの出力を理解する助けになると考えたためである。ゲームジャンル

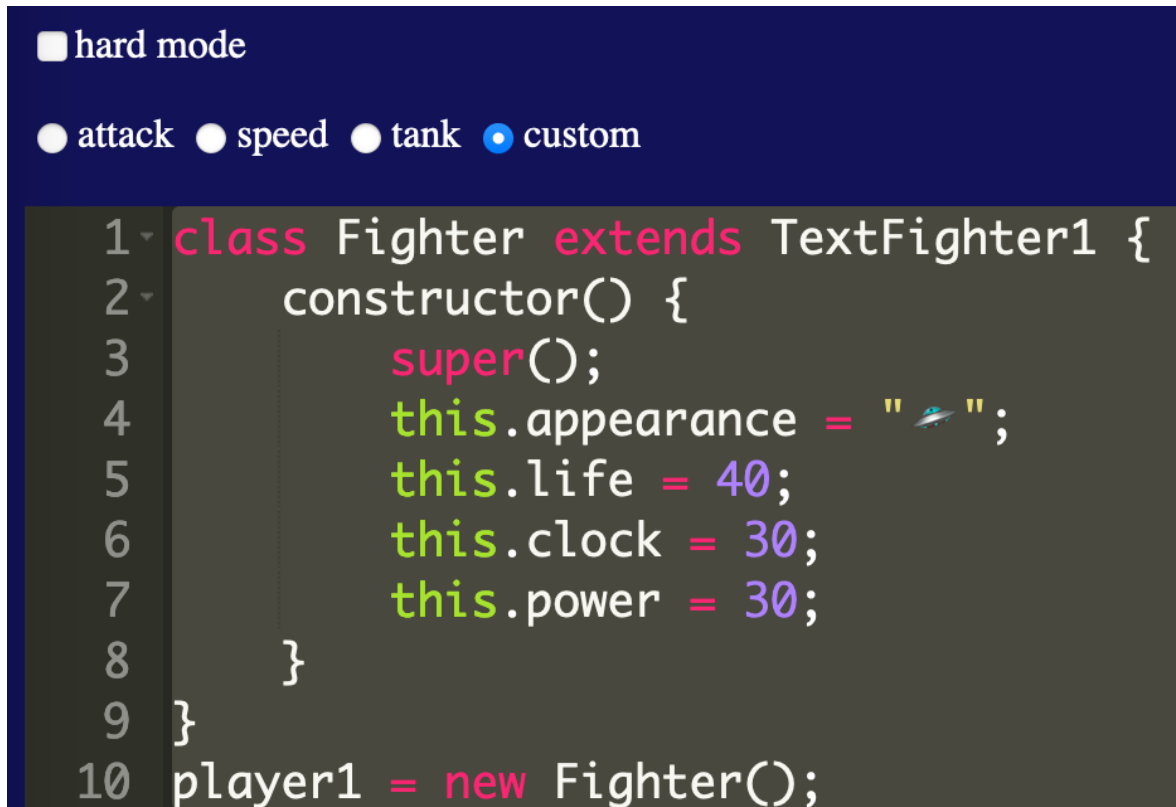
としては、シューティングゲームの体裁をとった。これはシューティングゲームが「敵の攻撃を避けて、敵を攻撃する」というプリミティブなゲームシステムであり、見ていて展開を理解しやすいと考えたためである。またゲーム UI は LivecodeLab や Hydra などのビジュアルライブコーディング環境を踏襲し、ゲーム画面上にエディタを重ねることで、プログラムとその出力の双方を同時に見ることが可能なように設計した。またゲームは以下の3つのフェイズに分かれている。

3.3.1 自機プログラミングフェイズ

対戦が開始するとこのフェイズに移行する。ここでは予めエディタにプレイヤーが操作するキャラクタのコンストラクタが記述されており、プレイヤーはパラメータを書き換えることができる。具体的なパラメータには appearance, life, clock, power がある。appearance はキャラクタの外見であり、文字列を指定できるため、絵文字などを使ってプレイヤーの好きな見た目を選ぶことが可能である。life はキャラクタの体力であり、いわゆる HP (ヒットポイント) を表している。非負の整数を指定でき、この値が 0 以下になるとプレイヤーはゲームに敗北する。clock はキャラクタが行動できる回数の多さを表しており、非負の整数を指定できる。プレイヤーは後述する行動プログラミングフェイズにおいて自分のキャラクタを制御するプログラムを記述し対戦するが、その際に記述したプログラムは 10 秒間ループして実行される。このループのインターバルを決めるのが clock であり、値が大きいほどインターバルは短くなる。power はキャラクタの攻撃力を表しており、これも非負の整数を指定できる。この値が大きいほど、自分が操作するキャラクタの攻撃が相手キャラクタに命中した際に削る life の値が大きくなる。双方のプレイヤーが各パラメータを記述し終わると次の行動プログラミングフェイズに移行する。このフェイズの様子を図5に示す。

3.3.2 行動プログラミングフェイズ

このフェイズに進むと、自機プログラミングフェイズで記述したコンストラクタを元に各プレイヤーが操作するキャラクタのインスタンスが作成され、ゲーム画面が表示される。各プレイヤーはプログラムをエディタに記述し、作成したキャラクタを操作する。プレイヤーは条件分岐や繰り返しなど従来の JavaScript の文法の他に独自に用意されたプロトタイプメソッドを使うことができる。用意したメソッドにはキャラクタを移動するメソッド (moveUp(), moveDown(), randomMove()) とキャラクタが攻撃を行うメソッド (shot()) などがある。またプログラム内で各キャラクタのパラメータを参照することもできる。両プレイヤーがプログラムを記述し終わると次のゲームフェイズに移



The screenshot shows a game programming interface. At the top, there is a settings menu with a dark blue background. It includes a checkbox labeled "hard mode" which is currently unchecked. Below it, there are four radio buttons: "attack", "speed", "tank", and "custom". The "custom" radio button is selected, indicated by a blue dot. Below the settings menu is a code editor with a dark background and light-colored text. The code is written in a syntax-highlighted language, likely Java, and is numbered from 1 to 10 on the left side. The code defines a class "Fighter" that extends "TextFighter1". The "Fighter" class has a constructor that calls "super()", sets "this.appearance" to a string containing a jet airplane emoji, and sets "this.life", "this.clock", and "this.power" to the values 40, 30, and 30 respectively. Finally, line 10 shows the instantiation of a "Fighter" object named "player1".

```

1 class Fighter extends TextFighter1 {
2     constructor() {
3         super();
4         this.appearance = " 🛩 ";
5         this.life = 40;
6         this.clock = 30;
7         this.power = 30;
8     }
9 }
10 player1 = new Fighter();

```

図 5: 自機プログラミングフェイズの様子

行する。なおこのフェイズでは相手プレイヤーがどのようなプログラムを記述しているかは見ることはできない。このフェイズの様子を図6に示す。

3.3.3 ゲームフェイズ

このフェイズでは行動プログラミングフェイズで記述したプログラムが10秒間ループして実行され、ゲームが進行する。この段階で両プレイヤーは相手プレイヤーが記述したプログラムを閲覧することができる。このフェイズにおいて相手キャラクタを攻撃し、lifeの値を0にさせたプレイヤーの勝利となる。勝敗が決まらない場合はプログラム終了時の各パラメータを引き継いだまま行動プログラミングフェイズに戻り、再度プログラミングしゲームフェイズに移行するという過程を勝敗が決まるまで繰り返す。このフェイズの様子を図7に示す。

3.4 評価実験

提案システムの使用・観戦に関する感想や影響、用法を調査するために評価実験を実施した。システムをプレイするプログラマと観戦するプログラミング初学者を集め、



図 6: 行動プログラミングフェイズの様子



図 7: ゲームフェイズの様子

システムでの対戦と観戦を実施し、アンケート調査と実際に対戦で使用されたプログラムのログを分析することでシステムを評価した。

3.4.1 実験参加者

実際にゲームをプレイするプログラマとしては、プログラミング(主にオブジェクト指向言語)の経験が3年以上ある大学院生2名(男性)に声をかけた。2名とも日常的にアクションやシューティング等のジャンルのゲームをプレイするため、システムをプレイする際にゲームに不慣れなためハンデが生まれることはないと思われる。また両者とも3年以上JavaScriptを使用した経験がある。またプレイを観戦するプログラミング初学者は、国際人間科学部にて開講されていた講義「プログラミング基礎演習1」の受講者をとした。受講者のうち、実験に参加した者は77名であり、うち37名が男性、40名が女性であった。またこの講義ではJavaScriptにおける変数、条件分岐、繰り返しなどの基礎的な文法を教えており、実験参加者は実験を行う時点でこれらを学習済であった。なお、うち23名は授業以前にプログラミングを学習した経験があったが、ソフトウェア開発を行ったことのある者はいなかった。またプログラマ含む実験参加者の全員が、競技プログラミングやプログラミングゲームなどのプログラミングを題材としたエンタテインメントを使用した経験がなかった。

3.4.2 実験内容

初めにプログラマ2人に簡単な事前アンケートを行った後、提案システムにある程度慣れ、用法を理解してもらう必要があるため、システムの練習をするための期間を設けた。システムの使用方法、ゲームシステム、独自に用意したメソッドなどについて説明した後、11/13から11/19の1週間システムを自由に使用させた。また、ただシステムを使用させただけではゲームに対する理解度が上がらない可能性があるため、期間中に2つのタスクをこなさせた。1つは1人以上とシステムを使った対人戦を行うことであり、もう1つは相手がランダムな戦略を実行してくる対CPU戦において、勝率が高いと考えられるプログラムを作成することである。なお期間中はシステムに関する意見・疑問を逐次報告させ、システム使用における問題を改善した。練習期間が終わった翌日に、プログラマ同士の対戦を行った。対戦はシステムに関するプログラマ同士のコミュニケーション等の所作を観察するため、感染症対策を徹底した環境で対面にて行った。両者の対戦時の画面を録画し、対戦後にシステムに関する事後アンケートを行った。なお練習期間中・対戦中にプログラマが記述した全てのコードのログを収集した。そして「プログラミング基礎演習1」の最終講義で受講者に事前アンケートを行った後、初学者が観戦しやすいように対戦動画を編集したものをzoomを介して閲覧させた。またその後にシステムに関する事後アンケートを行った。

3.4.3 実験結果

1. アンケート結果

表 4: 初学者に対する事後アンケート結果

Q	質問項目	評価分布					平均
		1	2	3	4	5	
Q1	ゲームを観戦するのは楽しかったか	3	6	33	27	5	3.34
Q2	ゲームの出力はプログラムを理解する助けになったか	0	9	25	30	10	3.55
Q3	観戦によってプログラミングに対する興味関心は高まったか	1	11	23	33	6	3.43
Q4	観戦によってプログラミングに関する理解が深まったか	1	23	29	17	4	3.00

対戦を観戦したプログラミング初学者に対する事後アンケートの内容及び結果を表3に示す。まずゲーム観戦の楽しさに関して (Q1) であるが、実験参加者の多くが肯定的な回答を示した。またキャラクタが攻撃、移動するなどのゲームの出力がプログラム理解の助けになったかという質問 (Q2) に関しても3以上の評価が多かった。また観戦によりプログラミングに対する興味関心が高まったかという質問 (Q3) についても、3以上の回答が多くなった。また観戦によってプログラミングに関する理解が深まったかという質問 (Q4) に関しては、やや低い評価が多い結果となった。またこれら意外にも以下の質問をした。

- Q5. このゲームを実際にプレイしたいか (プレイしたい/プレイしたくない)
- Q6. このゲームに他にどのような機能が欲しいか
- Q7. このゲームに関する意見

まずこのゲームを実際にプレイしたいかという質問 (Q5) に関しては64.9%がプレイしたいと回答した。またこのゲームに他にどのような機能が欲しいかという質問 (Q6) に関しては「色んな技が繰り出せるような機能」「通常攻撃以外にため技のようなものが欲しいと思った」「回復アイテム的なものや必殺技」「攻撃を受けたときの衝撃波」などの回答があり、キャラクタの行動、エフェクト、アイテムの追加などを求める意見が多く見られた。また「プログラム内容を解説する機能が欲しい」という意見も複数あり、Q4の結果にも見られるように、プログラムの内容をより分かりやすくする工夫が必要だと考えられる。またこのゲームに関する意見 (Q7) としては、「自分のプログラミングのレベルを上げたいと思った」「面白い」「プログラミングを楽しみながら学習できるという点でとても面白いと感じた」などゲームに対する肯定的な意見が多く得られた。しかし「プログラミング初心者には少し難しかった」「楽しめるようになるまでのハードルが高そう

だった」「今持っている知識では自分では動かすことが出来ないと感じた」などゲームをプレイするのは難しそうだという反応も多く得られた。またシステムをプレイしたプログラマにも同様に事後アンケートを行った。その内容・結果を表3に示す。

表 5: プログラマに対する事後アンケート結果

Q	質問項目	プログラマ A	プログラマ B
Q1	システムをプレイするのは楽しかったか	4	5
Q2	ゲームの出力はプログラムを理解する助けになったか	4	5
Q3	プレイすることでプログラミングに対する興味関心は高まったか	3	5
Q4	プレイによってプログラミングに関する理解が深まったか	1	3

この結果についても初学者に対する事後アンケートと同様の傾向があり、Q1, Q2, Q3 については肯定的な評価が得られたが、Q4 に関してはやや評価が低い結果となった。またそれら以外にも以下の質問をした。

- Q5. 累計何時間程度システムを使用したか
- Q6. ゲームの難易度は自分にとって適切だったか
- Q7. どのような点が簡単 (難しい) と感じたか
- Q8. ゲームに他にどのような機能が欲しいか
- Q9. 今後もこのゲームを使用したいか
- Q10. ゲームに関する意見

累計何時間程度システムを使用したかという質問 (Q5) に関しては1名が2時間、1名が6時間と回答した。またゲームの難易度は自分にとって適切だったかという質問 (Q6) に関しては1名が適切だった、1名がやや難しかったと答えた。具体的には (Q7) 「リファレンスが乏しくプログラムを書きづら買った」「現状のシステムではある程度システムを使い込んだ人を想定した作戦を立てづらかった」と回答した。ゲームに他にどのような機能が欲しいかという質問 (Q8) に対しては、「オブジェクトが持っている値を確認できるリファレンスのようなものが欲しい」「横移動ができれば、被弾しやすいリスクと引き換えに、敵が来そうな位置で敵より先に弾を打ち込めるチャンスが増える」と回答していた。また今後もこのゲームを使用したいか (Q9) という質問には2名とも「使用したい」と回答した。なおゲームに関する意見は「相手のコードを読んで対処するという部分をもっと積極的にするべきだったかもしれない。ただし、相手の位置に近づくようにプロ

グラムすれば確実に自分が先に被弾するので、自分は動かずに相手が近づくのを待つプログラム以外最良の手がないようにも思う。」というものが得られた。

2. コードログ分析結果

練習期間中・対戦中にプログラマが記述したプログラムのログ、提出したプログラムを分析することで、システムがどのように利用されているか、どのようなプログラムが記述されているかを調査した。まず vsComputer モードで使用されたプログラムの分析結果について述べる。このモードで使用されたコードは合計 327 件である。全てのプログラムに含まれていたキーワード(演算子を除く)の個数をグラフ化したものを図 8 に示す。もっとも多いキーワードは myself というものであるがこれは自キャラクタのインスタンスを代入するための変数として使われていた。プロトタイプシステムではプレイヤーが player1 になるか player2 になるかがランダムに決定されていたため、それによってプログラムの内容を書き換えなくて済むように初めに myself に割り当てられたインスタンスを代入していたと思われる。次に player1 というインスタンスを参照するキーワードが多く見られ、次いでインスタンスの座標を参照するキーワードである y, 条件分岐に用いられる if のキーワードが多く見られた。プログラムの内容を観察するとキャラクタの座標を参照し、その値によって処理を分岐するプログラムが多く見られ、キーワードの分析結果と一致した。また「0x」で始まるキーワードがいくつか散見されるが、これはプレイヤーが難読化ツールを用いてプログラムの難読化を試みた際に現れたキーワードである。

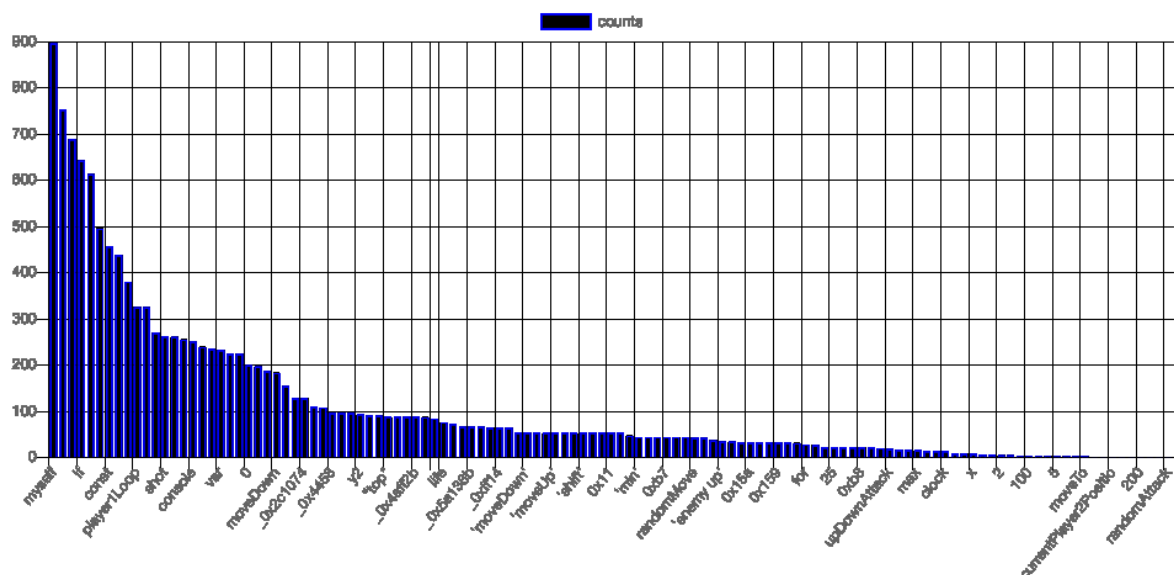


図 8: vsComputer におけるキーワード分析

次に vsComputer で投稿された各プログラムと SLOC・パラメータ数をグラフ化したものを図9表示する。全体として徐々に SLOC が増加しており、ゲームに習熟するほどコードの量が長くなっていったのだと考えられる。また SLOC が平行線をたどり、パラメータの数が増加している部分は難読化ツールを使用した部分である。

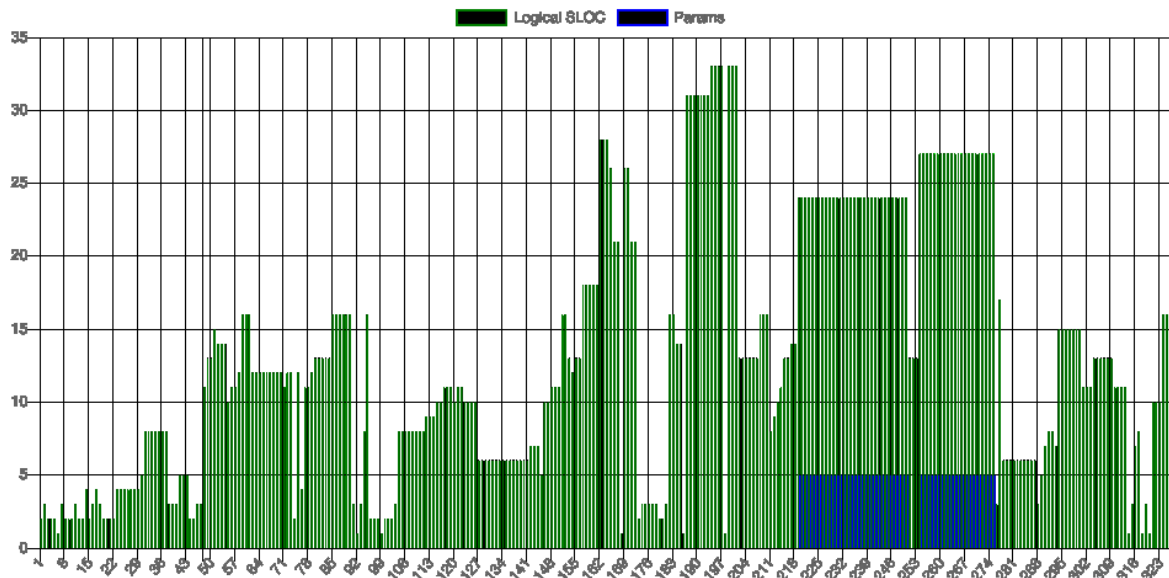


図 9: vsComputer における SLOC とパラメータ数

次に vsComputer における各プログラムの循環的複雑度を計測したグラフを図10示す。このグラフを観察すると循環的複雑度は11以下に収まっており、分岐によりプログラムの可読性を損なっていることはないと考えられる。

次に vsPlayer において使用されたプログラムの分析結果について述べる。このモードで使用されたコードは合計185件である。全てのプログラムに含まれていたキーワード(演算子を除く)の個数をグラフ化したものを図11に示す。vsPlayer において多かったキーワードは上から myself, if, y であり、vsComputer とプログラムの内容は大きく変わっていないと考えられる。

また各プログラムと SLOC・パラメータ数をグラフ化したものを12表示する。

次に vsPlayer における各プログラムの循環的複雑度を計測したグラフを図13示す。vsPlayer においても循環的複雑度の最大値は11であり、複雑な分岐はプログラム内に見られなかった。

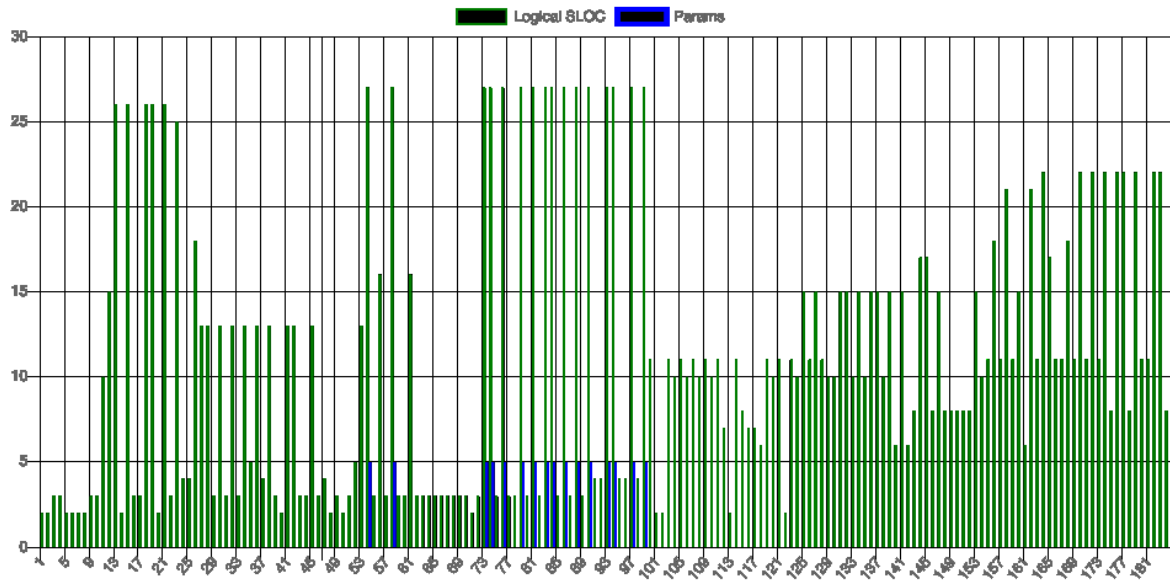


図 12: vsPlayer における SLOC とパラメータ数

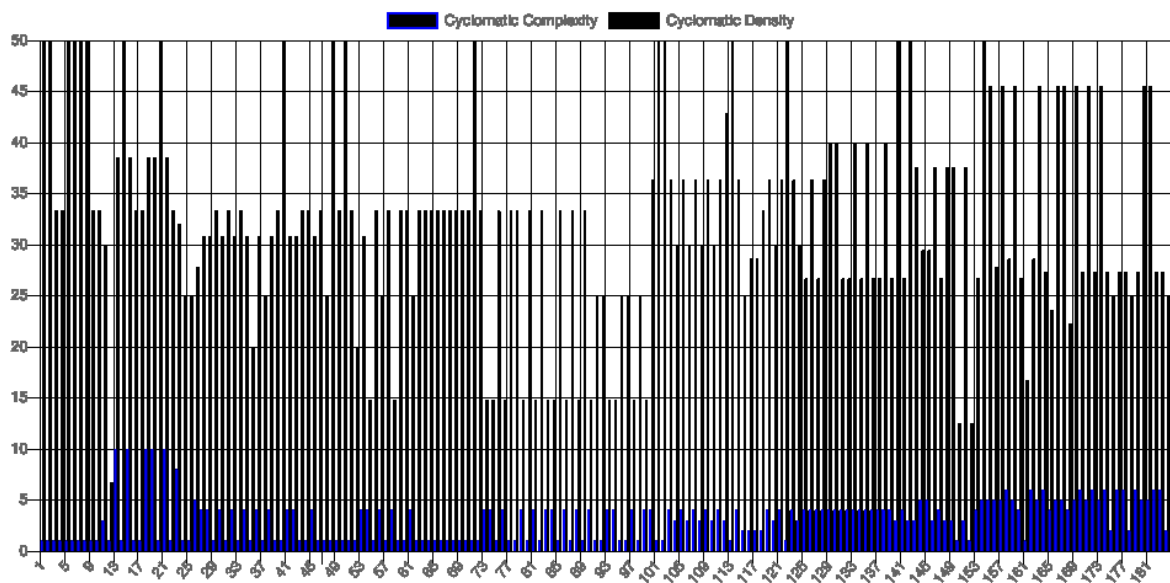


図 13: vsPlayer における循環的複雑度

イヤがどうプログラムを変更するか悩んでいる時間が多いため、リアルタイムな観戦においては観戦者が飽きないようにするための工夫が必要だと感じた。なおコードの内容・戦略がやや一辺倒になっていたため、1つの強い戦略に収束してしまわないような工夫が必要である。各々のゲームに着目すると一方のプログラマの書いたプログラムが圧倒的に他方よりも強い場合は1ターンで決着がついてしまう場合があった。初学者の対戦の観戦においては、ライブでプログラマ同士が対戦している状況を用意す

ることが困難であったため今回は動画を閲覧するという状況を用意したが、動画を見ただけでは実際に人が対戦しているという感覚が希薄であり、「プログラマがプログラミングしている」場面を見せるためには更なる工夫が必要であると感じた。また今回の評価実験において、システムに対する肯定的な評価が得られたものの、どのような要素が初学者のプログラミングに対する興味に影響を与えていたのか、特に提案システムにおいて独特な要素であるリアルタイムな駆け引き・アドリブを誘発する要素の影響について調査する必要があると考えられる。

3.5 課題

1. システムの改善

評価実験でのアンケート結果・コードログの分析結果を鑑みてより良いゲームデザインが必要であると感じた。まずパラメータバランスを調整し、1ターンで終わるなどすぐにゲームが終わって終わらないようにする。またプレイヤー同士の対戦において圧倒的に力の差がある場合でも逆転できるような要素を加えることで、プレイヤー・観戦者がより楽しめるようにする。さらにこのゲームにおける強さがプログラマのスキルに比例し、かつ観戦者にとっても可読性の高いプログラムを表示できるよう、最大コード長に制限を設けたり、循環的複雑度の最大値に制限を儲けるなどの工夫を加える。またプロトタイプシステムではエラーを画面にそのまま表示するだけだったが、プレイヤーを積極的にデバッグに向かわせる工夫を加える。これらの工夫に伴いUIを設計し直すとともにキャラクタのエフェクトも観戦に適切なものを採用する。

2. 今後の研究

今後はシステムに改善を加えつつもより多くのユーザを対象とし、ワークショップとシステム利用による効果の調査を繰り返す。習熟したプログラマだけでなく、プログラミング初学者にも提案システムのゲームをプレイさせ、そのプログラミングへの影響を調査する。特に本システムのリアルタイム性・アドリブによる効果を重点的に調査する。

4 まとめ

謝辞

本研究を行うにあたり，日頃より御指導，御激励を賜り，数々の御教示を頂きました西田健志准教授に深甚なる謝恩の意を表します。また神戸大学大学院国際文化学研究科に在学中，御教示，御激励頂いた神戸大学大学院国際文化学研究科の諸先生方に感謝すると共に，諸職員の方々に感謝いたします。日頃より数々の御助言を下さいました諸先輩方，快適な環境を作って頂いた研究室の皆様方，実験に協力頂いた実験参加者の方々に深く感謝いたします。特に研究活動に対する多くのアドバイスとサポートを頂いた工学研究科の清水友順氏，国際文化学研究科の三嶋哲也氏に深く感謝いたします。

参考文献

- [1] 永野真知, 早瀬康裕, 駒水孝裕, 北川博之: GitHub と StackOverflow におけるユーザ行動の統一的な分析, 情報処理学会第 79 回全国大会, pp. 363–364 (Mar. 2017).
- [2] 柴藤大介, 有蘭拓也, 宮崎章太, 矢谷浩司: CodeGlass:GitHub のプルリクエストを活用したコード断片のインタラクティブな調査支援システム, 情報処理学会インタラクシオン, vol.2019, pp.159–16 (Mar. 2019).
- [3] 一ノ瀬智浩, 畑秀明, 松本健一: ソースコード上の技術的負債除去を活性化させるゲーミフィケーション環境の開発, 情報処理学会関西支部支部大会講演論文集, vol.2016, (Sept. 2016).
- [4] 樋川一幸, 松田滉平, 中村聡史: コミュニケーションチャネルに入り込む研究室実験 BOT の提案と運用, 情報処理学会研究報告グループウェアとネットワークサービス, vol.3, pp. 1–7 (Mar. 2019).
- [5] 大村裕, 渡部卓雄: プログラム理解のためのコードリーディング支援ツールの提案と実装, 日本ソフトウェア科学会講演論文集, vol.31, pp.443–446, (Sep. 2014).
- [6] 石尾隆, 田中昌弘, 井上克郎: ソースコード上での情報タグ伝播によるコードリーディング支援, ウィンターワークショップ論文集, Vol.2008, pp.31–32, (Jan. 2008).
- [7] Topcoder, <https://www.topcoder.com/>.
- [8] 浜地慎一郎: Code Golf, http://shinh.skr.jp/dat_dir/golf_prosym.pdf.
- [9] SECCON, <https://www.seccon.jp>.
- [10] Robocode, <https://robocode.sourceforge.io/>.
- [11] Scratch, <https://scratch.mit.edu/>.
- [12] Viscuit, <https://www.viscuit.com/>.
- [13] ドリトル, <https://dolittle.eplang.jp/>.
- [14] J.Shi et al: Pyrus: Designing A Collaborative Programming Game to Promote Problem Solving Behaviors, Proceedings of the 2019 CHI Conference on Human Factors in Computing Systems, No. 656, pp. 1–12 (May.2019).

- [15] 水口充：成績評価のためのプログラミングゲームの設計と実践, 研究報告エンタテインメントコンピューティング (EC), vol. 2016, pp. 1–7(July.2016).
- [16] 三谷将大, 寺田実: Web アプリケーションによるゲーミフィケーションを用いたプログラミング上達支援システム, 第 27 回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ, (Sept.2018).
- [17] 増谷海人, 赤澤紀子：仮想現実を用いた初学者向けプログラミング学習システムの提案, 2018 年度情報処理学会関西支部支部大会講演論文集, vol. 2018, (Sept.2018).